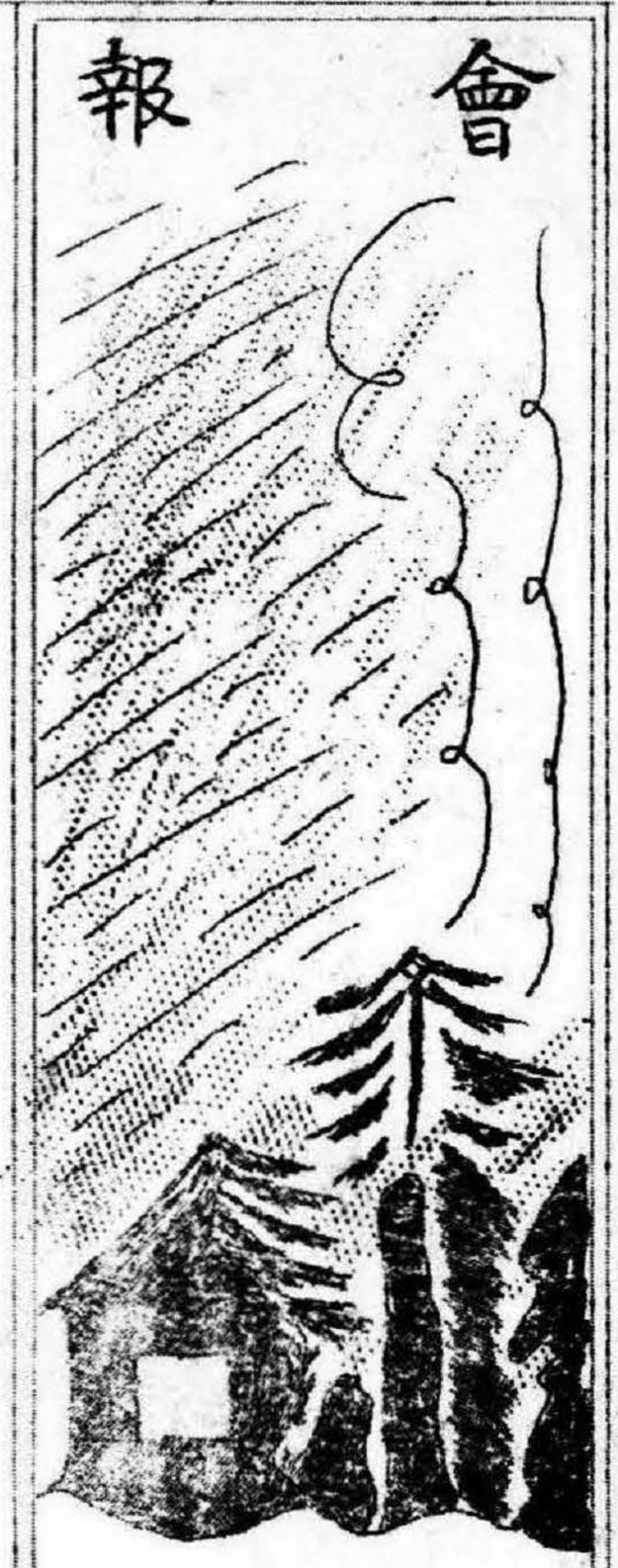

昭和八年五月二十八日発行　通巻第二十八号

早春の神樂ヶ峯

四月二日　快晴

越後にもこんな天気があるのかと思はれる程空は青く澄み渡ってゐた。鉢巻峠では一汗かゝずばなるまいと覚悟して、やゝクラスト気味の芝原峠路をスキーを肩に悠々と登っていった。おなじみのコンチヤン、ペンチヤン今日は生憎御欠席で謙ちやんとの二人きり。

昭和二年冬和田峠行以来の顔合（山登りとして）だから六年振だ。寫眞荘らしい二人連と後になり先になり峠道を登る。降りは楽の筈がくときたのでスキーを折ってはつまらないとソロ〳〵行かうと思ふのが何時の間にかコントロール以上の速力となって先第一回の顔倒。八木沢の御祠の前にしまひこむ。例の二人は慈大の連中と見えて色々な間道を知ってゐるので、其連中に跟いて今日は大島を通らず河原をやゝ上ってから直接鉢巻峠の下に出る。中腹辺の杉の伐林を始めたので怡度登りに何十本となく重なり合って置いてあるし、引摺り降した後の雪面は杉肌にこすられて小豆色に汚れてゐる。乾のまゝ少し登ったが、そろ〳〵歇けかゝってきたので滑って始末に負へない。そこで得意の軽便アイゼンを取付けてサッサと登り始める。断然工合がいゝ。謙チヤンはシールの御厄介になって蒼闘してゐる。如何にスキーの名手でもアイゼンの直登には敵はぬ、二十分も遅れて直にしかも大汗ダク〳〵で登って来た。一息入れて直に外の川へ向ふ。空は愈々青く、陽は愈々照りつける。眼鏡をかけてさへまぶしい位だ。爽快な林間行、再遊の気易さと今日はパーテイのある心強さとに峠を出て間もないのに早外の川の小屋まで来てしまった。九時十五分小屋の前の小池も春の水を湛えて緑先には陽炎がもえてゐる。微風すらない。何といふ春日和だらう。紀元節から約二ケ月ぶりて小鷲氏にお目にかゝる。東京からの土産物を出したり、餅を焼いたり仁茶を作ったりしてるうちに豫定の十時

を過ぎ十時半、今日の目的地神楽峯指して出発する。塗りたてのクリスターが存外よく利いて楽に登る。萩川を渡ったのが十一時、そこから棚の木立の緩斜面を登って十二時近く慈大ヒユッテを左手に見つゝすぐ彼の丘で晝食、東京から持って来た稲荷鮨大當りだ。さつきから胃の工合が悪いとか何とか云つて遅れ勝の諒坊ゝ俺は止してお こうしなんていふからまあ一つ位はいゝさゝとすゝめると、何時の間にか三つも平げて涼しい顔をしてる。

そらあの尾根まで登って、それからさ、あすこの黒木のとこを突切って白い処へ出たら、そこを左の方へ行くと神楽といふ訳さゝ

指す方を見ると眉を圧するといふ程ではないが遥かの彼方に聳ゆる雪嶺は相當なものである。

二時間かなゝつまあタップリだらうねゝ

十二時半、愈出発、彼から人の近づく気配がする。振返ると例の二人組だ。シール無しで少し登りかけたが、餃々た手に負へなくなりさうなので観念してシールを張った。降りそゝぐ様な陽を浴びつゝ樹の原始林を登ってゆく爽快さはたとへやうがない。これが早春の雪の魅力なのだらう。登高約一時間の後小さな尾根を一つ越えて清八沢の源頭に降り、其左股の黒木を縫って鋭いキックターンが続く。早朝から約六時間の連続登高の上に昨夜の夜汽車中で碌々寝て居ないので流石頑張り屋の二人も相當疲れてきた。両方共口にこそ出さないが十歩で止り、二十歩で息を吐くといふ有様だ。

二時、上の芝の眞白な円頂が見えて、其処から尾根続きの南端に大きな雪庇をかけた神楽の頂が手にとるやうに近い。苦しい登高が一しきり続いた後に五つ六つ小さな尾根筋の凸起を越えるとそこが神楽ヶ峯二、〇六九米の三角点だった。丁度二時半、苗場の頂はすぐそこだが一旦一五〇米急降してからの二〇〇米の登りは到底スキーの登高を許さぬナイつりツヂの急登である。眼を東に転ずれば工越国境の銀嶺は堆々として遠く魚沼駒ケ嶽に連り、其山波の遥か彼方に日光白根、至佛、燧の雄峯が鈍い銀光を放って輝いてゐる。空は朗もすぐやうな紺碧に晴れ渡り、微風さえもない。二千米の山頂には春光煦々として汗ばむ位だ。

正面が仙ノ倉だね、肩までで登れゝばあとは鴨じやないかゝ

浅貝に泊ってあの沢を登って頂上から毛度沢を降って中里に出れば其の日のうちに東京に帰れ

るなし

「来年・是非やらうよ、ねし」

何といふ素張らしい雪の大観だらう。三時愈々滑降にかゝる。案じて居たクリスターは思の外よく利いて、やゝクラスト気味の雪面に有るか無しかのシュプールを残してスキーは矢の様に走った。嘴ぎ登った上の芝も清ハ沢も、黒木の森も、見るうちに走りすぎて下の芝の尾根の蔭に暫時の憩をとる。

斜陽が白銀の大斜面に輝き渡って実に美しい。やがて樹の森を縫ふ斜滑降が続く。謙ちやんが樹間を縫って矢の様に降ってゆく。転んでも降りは早い。慈大ヒユッテをまた〳〵く間に過ぎて早、祓川まで来てしまった。早春の夕寒が身に沁みて、雪面はそろ〳〵クラストし始めてきた。祓川を渡れば最う外の川の領分だ。そこから快走十分の後、外の川の小屋にスキーをぬいだ時に五時、夕餉の煙が原始林の間を静に流れてゆく。

（香山浩一郎）

登山者のメッカ、ツエルマット（四）

云ふ迄もなく此の新しい活動の凡んだ地方は先づ中央アルプスの主なる山群であった。グリンデルワルトを中心とするオーバーランド、ポントレジナを中心とせるエンガデイネールアルペン、針峰エギーユを囲らすシヤモニイ、就中ツエルマットを中心とするヴアリゼールアルペン等は各々異った事情の許に優れたる登山中心地として勃興して来たのであった。殊にツエルマットは他に比較し得ぬ山岳地帯を持ってゐる事は後述の通りである。

先づヴアリゼール主脈の南方に位する高峯を西より数へれば Tête Blanche, dent d'Hérens, Matterhorn, Breithorn, Zwillinge, Lyskamm 及びモンテ・ローザより Weisstor 附近に終るツエルマット谿谷の谷壁とも云ふべきものを挙げなければならない。次にヴイスプ谿谷を挟んで二つの平行支脈がある。即ち西なるは Dent Blanche, Gabelhorn, Zinalrothorn, Weisshorn. 東なるは Strahlhorn, Rimpischhorn, Allalin, Täschhorn 及び Dom（瑞西国内最高の山）等を有する背稜であって、以上は總て一流の巨峯全体としてヴアリゼールアルペンを形成してゐるのである。

従ってツエルマットはヴアリゼールアルペン毎に稍々低き秀峯を従へグリンデルワルト、シヤ

モニー或はポントレジナの如く氷河地域の一端或は外部に位するのではなく其の中心、換言すれば夢幻の如き高峻地帯の眞唯中に横はって居る事になるのである。

然しながら此の新しいロマンテイークな景敢なる行動をなさうとして此の中心地に侵入した者は極く僅かの人間であって、又彼等の目指したものは周囲の高峯のみであったのである。

登攀史の初期に當って已に小セルヴァン、ブライトホルンそれに伊太利側からモンテ・ローザの一側峯が登られてから人々の攻撃が期せずして此等周囲の最高峯に順次向けられた事は云ふ迄もない。次に年代順に其の経過を表示して見やう。

1848　Grenzgipfel（monte Rosa）
1855　Lyskamm（monte Rosa 最高点）
1858　Dom
1859　Rimpischhorn, Cal Durand
1860　Alphubel, Caldevalpelline
1861　Nordend（monte Rosa）, Lyskamm, Weisshorn, Caston, Felikjoch, Strahlhorn, Besiagjoch, mischabeljoch, Blanche,
1862　Täschhorn, Lenzspitze, Dent d'Hérens, Zwillingjoch, Pollux, Zinal Rothhorn, Schallijoch, Morningpass, Wellenkuppe, Matterhorn.
1863　Parrotspitze, Dent d'Hérens,
1864　Pollux, Zinal Rothhorn, Morningpass, Wellenkuppe, Gabelhorn, Matterhorn.

洵に此の時代こそは吾々が今日、驚嘆と嫉妬さへも交へて見かへる所の輝しき所謂「黄金時代」であったのである。実に當時は若きアルピニズムの時代であり、好機會に恵まれたる時代であった。

然し乍らツエルマツイ本来の興趣は此等峻嶮なる山々のみではなかった。

ツエルマットは前にも述べた様に、二重に文明の国々より遠隔の地にあった。従って總ゆる事物を同一標準に持ち来らんとした超文明の悪影響にいつまでも強く対抗し又犯されずに済んで居たのである。玄人登山家の外に此の地を訪れた者は心底より山を愛する人々であった、彼等は長いヴイスプの谷を遥々と徒歩で遡り、且つ又山に於ける生活の欲善といふものをよく理解した。一度来たものは又訪れた。同じ心持ちを有するものが此の狭い土地に集って来る、其処には自然お互ひを知り合ひ、一種の社會といふものを作り上げるの

である。此の事はアルプスに於ても他に見られぬ現象であった。

（四―五頁）　（然）

御前山

五日市は吾々プロ・ハイカーに幾多の安価な日帰の旅を提供してくれる。天長節の休日を利用した此の御前山行はその溢美のものであらう。新宿を六時過の汽車に投じて立川で乗換へ五日市に八時十分着これに連絡するバスで十里木に至る。道路工事も目下着々進捗してゐるので、本宿迄バスが延長されるのも近いことであらう。然し秋川の美は十里木本宿間にある様である。本宿を過ぎ北秋川の谷に入ると、行手の高い処に可成美事な滝が望まれる。天狗の滝と云ふそうだが、徒遠から斯程の立派な滝が眺められるのは珍らしい。

御前山の登路は地図に見られる通り沢山あるが、僕は尾根通りの径を選んだ。此の径は長いけれどもアップ・ダウンが殆んどなく一体に緩かな登りで、殊に日向平の上辺り迄の所謂尾根通、頗る気持が良い。最奥の農家で茶を所望して小ボロであり、子供の如きは完然襤褸の子である。鍋で煮てゐる晝飯は黒いどろ〳〵したものであらう。

御前山一帯の山腹は灌木が密生してゐて、まだ葉が出ないので遠くから見ると裸山の様に見える。山躑躅の紫の花が僅かに生彩を與へてゐる。

ゆっくり登ったので汗も出さずに午後三時頃頂上に着いた。頂上も矢張り灌木が密生してゐて眺望は效がない。御前山は高さに於て御岳、大岳を遙かに凌いでゐるにも不拘、里人の信仰の対照となってゐないのは不思議である。里に近接してゐながら頂上に石祠すら見出ないのは七、八田上下する所があった。

御前山から大峠までの尾根はどジクザクの新道が出来たので秘めて容易であった。水辺のわさび畑には白い花が一杯に咲いてゐた。小雪蒲から徒遷に出る約百米の登りで、惜しくも不快な汗を出して了って残念であった。余り呑気に歩いて来たので氷川に着いた時は薄暮大略時半となり僅かの所でバスの終車を逸して了った。客が一杯になるので、その生活状態は東京府内にか近待って発車するといふ特別幅時バスが出来た。午後九時辛くも新宿に帰ることが出来た。

滯歐土産漫文

一九三一―四―二九、　平家蟹

滯歐土産の漫文でも書けと命ぜられてから既に二三ヶ月の日が経って了まった。とに角百貨店生活の様に私生活に余り時間のない我々には一つの文債を果す事は容易ではない。殊に拙文悪筆の上に面倒くさがりの僕にとっては大変な仕事だ。

丁度例の意地汚さから急性腸胃カタルで病欠三週間、此の時とばかりペンを辿らす事にした。さて滯歐と云っても主として巴里の屋根の下にくすぶった関係上、どうしても巴里のあれやこれやがペンの先に浮び上って来る。つまり此れから巴里で見聞して来た二三の日本人のエピソードを御紹介しようと云ふ訳。

歐洲行の伏見丸、各方面の人を乗せてゐる中に年配の一老紳士が居た。此の人はさる官署の相當のお役人の由、船上でも一しほ役人風をふきまくって別格に祭り上げられてゐた。此の人が巴里滯在中、某文士殿と僕とが一日仝船のよしみで御案内役を仰せつかった。

勿論彼氏フランス語のフの字も知らない御人。夜の部となって、モンマルトルの或キャバレーへ酒を飲みながら同伴の婦人とダンスをする処、合間〳〵に余興として卜デプト女の裸踊り、ロシヤのコサックダンス等がありボルドー一杯に三十法をぼる家）に行った。ダンスも出来ぬ男連三人ぽかんとしてゐたまではよいが、さて帰る段となって勘定を拂ふ時、そのお役人殿、あらう事かチヨッキのボタンを外し、ズボンのとさうとし始めた。周囲の人達はあっけにとられる、僕達は赤くなる、それでも精はず氏は今度ワイシやツを外して、とう〳〵腹巻を引っぱり出したものだ。考へても下さい、巴里の真中、それも華かな遊び場で、すぞ。尚氏は家語して曰く「毛唐は毛唐、日本人は日本人だし」と。私はつく〳〵誤られた東洋蔑視丈と云ふものを感じ、如何に斯う云った事が日本を誤解させるか、傷心させられました。諸君、斯んな例が案外多いんです。

聯盟諸国に好戦的な野蛮な国だと解せられるのも無理がないと思はれました。

さて次のお話は一寸色っぽい方面。或日、或日本人が或るカフエトで便所へ行った。大低の便所がそうである様に男と女とが壁一つを距てゝあった。そこで其の日本人は計らずも女便所の方から「我の千鳥」の口笛を聞いたのだ。異境の空、便

所で聞く祖国の歌の調べはその男を感傷的にする
に充分であった。やがて彼も其の口笛に合奏させ
初めた。彼の好奇心は燃えた。こんな処にこんな
快活な日本のお嬢さんが居たかしら？。
女便所のドアーがきしった。それっと許り彼も
飛び出した。おゝそこには日本のお嬢さんと思ひ
きや、フランスのシラクな女の子がにこっと笑ひ
乍ら居るではないか、年な十九か廿三か、兎に角
近所の町の天女氏ぢやなこそうな。彼の好奇心はボンヂュールマドモアゼル
いやが上にも、頬面神経をこはばらせつ今日はお
嬢さん」と叫んで了った。ボンジュール
「しゅ。メたと許り彼氏、貴嬢は日本の歌を御存じ
ですかし。彼女の答は「ウイ」。
斗は吉、彼の誇ひに彼女が乗ったとか乗らなか
ったとか。或は其の女は元、日本の画家に愛され
其の画家が帰朝後日本恋しさに暮してゐるとか。
後日、彼氏がのろけ交りでカフエのテラスで、
カフエ・ノアールを飲み乍らフロ笛が取持つ縁かい
なしと頼して話した巴里夜話の一節。之で終り、
それでは今度は私が皆様にボンソアヨナラをしませう。
（一九三三、四、二。　飛竹生）

十勝岳行

三月十九日　雪、旭川ー上富良野ー中ノ茶屋ー
吹上温泉ー（午後三時吹山へ行く）
上富良野から中茶屋迄約二里半許ど平で、馬橇
で行った方が利口だ、中茶屋から吹上温泉迄約
一里半。
三月二十日　快晴、温泉ー前十勝ー十勝、
奥野先輩のアザラシがワックスの加減で一本と
れて了ったので、火口から百五十米位下でアイ
ゼンを穿いた。案外雪が柔かくて苦労した。十
勝の頂上の近く迄スキーで行けた事を思って今
でも惜くて仕方がない。帰りはシーデポーの所
で一時間半も遊んで温泉へ帰ったのは二時半。
無意根岳行
三月二十六日　快晴、定山渓ー奥無意根小屋
小舎から二時間程登って、一〇五二米三の三角
点の頭迄行って来た。無意根が夕陽に浮んでゐ
るのがとても美しかった。
三月二十七日　曇、小舎ー一〇五二米三の三角
点ー無意根岳ー中岳ー並河岳ー喜茂別岳ー並河
岳ー小屋。
並河岳と喜茂別岳との間は、直滑降に、ボーゲ
ンに、クリスチヤニヤに何にでもよい。一度針

葉嗣會の方々に滑って戴き度い。僕達だけが滑ってゐるのが悪い様な気がしてならなかった。

羊蹄山行

四月三日　快晴、　登山事務所より。二日夜雨が降ったのですっかり諦めてゐたが朝になって晴れ出したので急いで支度にかゝった。道は森林帯を抜けてから南寄りに行って廣い雪の斜面に入り、池のある所のコブの左目がけて眞直に登る。一五。米辺にスキーを置いたが雪柔く登り難くかった。下りは相當に面白く四合目からはザラメ雪となり非常によく滑った。

四月九日　高見君の歓迎スキーに、奥無意根小舎を経て無意根へ行ったが、森林を抜けてからはパン〳〵に堅くなってゐたのでそこから引返した。

（奥野綱重、　磯岡清）

拝啓　出発の節は色々御世話になり有難く御禮申上げます。其後海上平穏に明日はコロンボ入港の豫定です。香港出発以来すっかり夏になりシンガポール辺りでは木々の若葉がしたゝる様な新緑で、それが眞赤な土と実に明快なコントラストをなして目に飛び込んで来ます。海の色も熱帯らしい紺青で日の光を反射しまばゆくかゞやいて居ります。空には羊の群の様な雲が棚引き其の後に眞白な入道雲が丁度大雪嶺の如く懸って居ります。夜になれば船は燐光に輝く波を分けて進み空にはサバンクロスが妙なるエメラルドブルーにまばたき、スパンカ、スパイカ等見なれぬ星群を従へて静かに南の空に弧を画いて渡ります。エクゾチックなコヽナッツの林と夢見る様なマラヤの女の目とは私によって最も印象的なものです。尺月だけは本當に、云ひ古るされた言葉ですが何時も同じ姿を見せて居ります。何れまたグリンデルワルドからお便りします。さよなら。

（雲）

會員消息

芋川總一　去月末、大阪日本ペイント自治寮を引拳げ上京。目下大村商店勤務、母堂を亡ふ。

鈴木英雄　去月　父君を亡ふ。

村尾金二　日本圖管を退社

太田又一　徴兵檢査の為上京

◎會費未納者及び今期會費六月中には是非願ひます　（鈴木）